



第4図 石板式土器の無文土器

迫 1993)。前迫の指摘によると、「典型的な石板式土器ともいえる古段階のもの多くは、外反する口縁部に2ないし4か所の頂部をもついわゆる山形口縁の形態を呈している。(中略)この石板式土器古段階を代表する山形口縁こそ瘤状突起の祖形ではないかと考えられる」と述べ、その初源について言及している。組み合わせという視点で石板式土器を見ると、石板式土器新段階においては、波頂部の肥厚を祖形とする瘤状突起の付くものと波頂部を有しない平口縁のものがセットとして存在している可能性も考えられるのである。また、石板式土器においてはしばしば無文土器も出土している。無文土器は、南九州貝殻文系土器においては筆者の知るところほとんど例が無く、石板式土器以前の段階では現在のところ見受けられない。石板式土器に関する無文土器出土例(第4図)も決して多くはないが、



第5図 3つの器形の組み合わせ

石板式土器においては無文土器が有文土器とセットをなしていたとも考えられる。

最後に、波状口縁の桑ノ丸式土器がほとんど見られない点を挙げたい。下割形式土器に関しては、波状口縁や瘤状突起の付くものなどが見られることから、石板式土器との連続性が窺える。この点で考えると、桑ノ丸式土器の段階ではすでに波状口縁という概念が消失している可能性が指摘できよう。また、この両者と共に押型文土器が出土する遺跡例が多いが、このような南九州貝殻文系土器の変化は押型文土器との接触によって生じた可能性が考えられる。また、押型文土器にも平底化や波状口縁の出現などの変化が生じている。このことから、縄文時代早期中葉の南九州において使用する器の形や文様に変化が生じていると捉えられるのである。

5 おわりに

南九州貝殻文系土器の研究は多くの研究者によって進められ、その様相は広く知られるようになった。だが、レモン形をはじめセット関係など多くの問題点を抱えていることも事実である。

先に述べたように、南九州貝殻文系土器に関してはこれまでのように円筒形か角筒形のいずれかに分類をするのではなく、レモン形という器形が存在していることも視野に入れ、特に小破片に至っては器形の判断は慎重に行わなくてはならない。これらの問題を解決するにはまだ浅学であるが、組み合わせに関して自分なりに研究の方向性を確認する上で覚え書きを記した。

まとまりを欠く内容ではあるが、今後とも精進していきたい。御指導いただければ幸いです。

【註】

- 1) 本稿において用いる組み合わせもしくはセット関係とは、型式の範疇というやや広義の意味合いで用いており、厳密な意味の同時共存を述べているわけではない。
- 2) 新東は、岩之上式土器と呼んでいる(新東 1989)。
- 3) 新東晃一他 1978 『桑ノ丸遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 4) 円筒形と角筒形の関係に関して述べたことがある。この時点では、平口縁と波状口縁についてのみ触れた(黒川 2000)。これ以降にレモン形を実見する過程で円筒形・角筒形・レモン形→平口縁・4か所の波頂部・2か所の波頂部という関係を推定した。

【引用・参考文献】

- 鹿児島県教育委員会 1981 『加来山遺跡・神ノ木山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 知覧町教育委員会 1983 『水野遺跡』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 上杉彰紀 2000 『調整技法からみた縄文早期貝殻文土器』『南九州縄文通信』№14 南九州縄文研究会